台湾の出産・育児事情（〇歳―二歳）

岡崎幸司

愚息は一月で満二歳になった。筆者は遠距離通勤ゆえに平日は時間がなく、専ら愚妻が仕事の傍ら豚児を育ててきた。今回は日々苦労している愚妻に感謝しつつ、出産から二歳過ぎまでの子育てについて駄文を綴ることにしたい。

出産から月子中心へ

台湾では妊婦が陣痛発生まで働くことは珍しくない。勤め先で陣痛に見舞われた時はそのまま病院へ直行する。週休二日の愚妻は、予定より十一日早い日曜に陣痛が起き出産したが、前前日の金曜まで平常通り業務に従事していた。

出産後は自宅あるいは夫婦の実家で暮らすか、新生児とともに「産後護理之家（月子中心）」に入るのが一般的である。愚妻は月子中心での静養を希望していたので、産後の有給休暇五十二日のうち前半の二十日を月子中心で、残りを実家で過ごすことになっていた。

出産した産婦人科医院には月子中心が付設されていなかったことから、愚妻は分娩後三日で退院、豚児を連れて予約していた他の産婦人科医院の月子中心へ転院した。愚妻がお世話になった月子中心は、ホテル感覚の一人一室制、部屋数十五、母親にはデザート二食を含め一日五食、産後に配慮した食事が出される。子供は全員保育部屋の保育籠に入れられ、十名ほどの女性看護士さんが二十四時間体制で面倒を見る。毎週二回小児科医の先生による診察が行われるほか、黄疸の治療も実施される。さらに乳児の入浴方法などの手ほどきがあるうえ、退院後もしばらくは育児の電話相談に無料で応じてくれる。保育部屋はガラス張りで、医師・看護士以外は入室禁止、カーテンが開かれる時間帯だけ廊下から子供を見ることができる。この時間帯はドア一つ隔てた隣室で子供を受け取り自分の部屋に連れて行くことも許されている。さて、費用であるが、サービスが結構な分、料金も結構で、二十日間滞在した愚妻の場合、大卒初任給の約三倍にのぼった。月子中心は費用は高いものの母子ともに安心して産後を送れるため、多数の妊婦が入居を希望、実際に見学するなどして満足すれば予約を入れる。付言すると、月子中心の出張サービスや出産後を自宅等で過ごす母親向けの食事を製造宅配する会社もある。

満月の習慣

月子中心を退院し実家に戻ると、一週間ほどで「満月」が到来することになった。満月というのは子供誕生後（出産後）一ヶ月が経過することであり、三つの点で重要な意味を持つ。

第一に、母親にとってはようやく洗髪が許される日である。台湾では、満月まで入浴可・洗髪不可という風習があるため、母親は一ヶ月間洗髪を我慢せざるをえず、頭髪が気になってしまう。愚妻によれば、昔はさらに厳しく、入浴すら遠慮させられていた、とのことである。

第二に、満月は「状元筆」（状元とは科挙の最終試験首席合格者）の美名で知られる「胎毛筆」を作る時でもある。頭に生えた胎毛から筆を製作、「臍帯印章（肚臍印鑑）」（へその緒を使用した印章）、「足印」（足形）、「照片」（写真）とともに子供誕生の記念とする。足印に替えて「手印」（手形）を用いることもある。

第三に、満月を迎えた夫婦は出産祝いをくれた人などにお礼をする必要がある。男子誕生の時は「油飯・雞腿・雞蛋」（台湾版赤飯・鶏の骨付きもも肉・ゆで卵）の三点セットまたは簡略して油飯のみ、女子誕生の際はクッキーをはじめ菓子類を贈るのが慣わしであるが、近年この伝統は崩れており、男子誕生であってもクッキー類を贈ることが多い。筆者夫婦は、出産祝いは愚息のもの、お返しの会計は筆者持ちとしたものの、何を贈ればよいか迷い決断できずにいた。決めかねていたときに、義母と愚妻の「乾媽」（血縁関係はないが互いの合意で親子関係を結んだ母親）の二人から、クッキーをセット（二種類計二箱）で贈ることにし、品物

も選んだのでどうか、との連絡を受けた。ありがたい話ではあったが、少々困惑した。月子中心の費用を納めたばかりで、大盤振る舞いに対しては懐具合が心もとなかったのである。愚妻は、と言えば、筆者の心配をよそに二人の提案に大賛成であった。どうも一枚咬んでいたらしい。それはともかく、試食したところ美味であったし、包装用の箱もシンプルで感じの良いデザインだったので筆者も覚悟を決め同意した。こうして、仲人の先生にはクッキー以外に油飯三点セットを贈ることもあわせ、満月の贈り物が決まり注文したのであるが、予想に違わず、二百数十人分合計五百箱を超えるクッキーの請求書を見たときにはため息が出てしまった。

託児開始

夫婦共働きが普通に見られる台湾では保母さんなどに子供を託す家庭が多い。筆者夫婦も、愚妻の産後休暇明けは育児と仕事の両立が難しいことや義母の健康状態を考慮し、二〇〇五年三月末から保母さんに預けることになった。月曜の朝から金曜の夕方までを保母さんに任せ、それ以外の時間を自分たちで育てることに決めたのである。週に一度水曜の夜に愚妻が保母さん宅を訪れて豚児に接すること、月・火・木は夜に電話をかけて様子を尋ねることにし、保母さん夫妻の了解を得た。平日は二十四時間預けることにしたのは、毎日送り迎えすると生後間もない体に悪影響を与えるのではと危惧したことにくわえ、仕事から帰り心身ともに疲労しているなか翌朝まで三、四時間おきに授乳したり紙おむつを交換するのは大変だからである。

保母さんには手当を渡さなければならない。月給は大卒初任給を若干上回る水準（平日二十四時間託児の場合）、ボーナスは年一回月給一カ月分である。また、端午節・中秋節の両祝日にも相応の金額を包む必要がある。週末や休日に託児すると追加の手当が求められるし、粉ミルク・紙おむつなどは自費、子供が着る下着・服の洗濯も親の責任とされている。台湾では粉ミルクや紙おむつは輸入品が大半を占めるためかなり高い。子供用の衣料が高額なこともあり、子育ては日本に負けず劣らず物入りとなる。そこで、保母さんの手当と小物は筆者、その他は愚妻という形で育児費用を分担している。

愚息を預け始めてから一年が経過した二〇〇六年四月に託児内容を見直し、平日の日中だけ保母さんに依頼することにした。骨が折れる子育ても一歳を過ぎれば多少は楽になるし、できる限り愚息と一緒にいた方がよいと考えたからである。託児時間の縮小に伴い保母さんに渡す月給も大卒初任給を幾分下回る水準にまで変更された。もっとも、減額分を毎朝夕に豚児・愚妻を送迎する義父のガソリン代に充てることにしたため、筆者の負担額は以前と変わらない。住宅ローンの元本返済も筆者の役目なので、月給の大部分は育児関係の費用と住宅ローンの返済に消えていき、手元には雀の涙ほどしか残らない。稼ぎが悪いのか、出費が多いのか、おそらく両方だと思うが、父親はつらいのである。

愚息の日常を説明すると、平日は朝食を終えてから義父の車で愚妻・義父母と台北市の中心部へ向かう。保母さん宅、愚妻の勤務先を回った後、悠々自適の義父母は気ままに過ごす。夕方になると義父が車を出し、まず愚妻を、続いて豚児を迎える。その間、義母は筆者夫婦の分も含め夕食作りに専念、愚妻の残業が長びくときは愚息を迎えにいく。豚児は保母さん宅で入浴と夕食を済ませており、帰宅後は主に愚妻が相手をし、午後八時前後に就寝させる。愚息は燃費が悪く、日中に限らず深夜にもミルク補給を要する。二歳少し前までは牛乳成分の粉ミルクを飲ませていたが、愚妻の判断で現在は羊乳成分のものを使っている。これは、漢方で羊肉が体に良いとされていることによる。

土・日は天気が良ければ、朝食後に義父母とともに家族全員で外出、公園等で運動した後に義父母宅へ立ち寄る。義父母宅に着くと愚息はすぐに入浴、しばらくしてから昼食、続いて季節の果物を楽しむ。その後は拙宅に戻り昼寝に入る。昼寝から目を覚まし、一段落つくと夕食である。夕食が終了すると親子三人で音楽を聴いたり、玩具で遊ぶなどして過ごし、平日同様、夜八時頃床に就く。豚児の平均的な一週間を簡単に述べると以上のようになっている。

読者諸賢の中には台湾の小児医療に興味をお持ちの向きもあろうかと推察するが、稿を改めざるを得なかった。ご寛恕を乞う次第である。

（おかざきこうじ・中華大学人文社会学院　副教授）